

〔研究ノート〕

イブン・ハテীব・アンナースイリーヤ著
『アレツポ史における選り抜きの真珠』

——作品と写本——

谷 口 淳 一

はじめに

十五世紀前半にイブン・ハテীব・アンナースイリーヤが著した『アレツポ史における選り抜きの真珠』⁽¹⁾（以下、『選り抜きの真珠』と略記）は、本書よりやや遅れて成立したスイフト・イブン・アルアジャミーの『アレツポ史における黄金の蔵』⁽²⁾（以下、『黄金の蔵』と略記）等と並んで、マムルーク朝前・中期のアレツポ史研究にとって重要な史料の一つである。『黄金の蔵』は一九九六年に校訂が出版されたが、『選り抜きの真珠』⁽³⁾は、現在までのところ出版されていないようである。

このたび私は、本書のほぼ全体を取めた唯一の写本と思われるオクスフォードのマートン・カレッジ図書館所蔵写本⁽⁴⁾（以下、O写本と略記）と、第三巻のみではあるが比較的状态が良いパリのフランス国立図書館蔵の写本⁽⁵⁾（以下、P1写本と略記）を調査する機会を得た。この二点に限っても、詳細な調査結果を報告する段階までには至っておらず、未見

の写本が数点残されている。しかし、後述するように、O写本に基づいた本書の紹介、つまり本書全体を見渡したうえでの紹介がいまだなされていない現状においては、ひとまず現段階までで知り得た情報を報告することにも、一定の価値はあろう。以下本稿では、本書の著者と内容について紹介したのち、O写本とP1写本を中心に、写本に関する情報を提示したい。

一 『アレッポ史における選り抜きの真珠』の概要

(一) 著者

本書の著者、アラール・アッディーン・アブー・アルハサン・アリー・ブン・ムハンマド、通称イブン・ハティープ・アンナースィリーヤ ('Ala' al-Din Abū al-Hasan 'Alī b. Muḥammad, Ibn Ḥaṭīb al-Nasīriya) に関しては、弟子の一人であるスイプト・イブン・アルアジャミーの著書『黄金の蔵』に、身近にいた人物ならではの情報が見られるが、同時代の代表的な伝記集であるサハーウィーの『ヒジュラ暦九世紀の名士たちの輝かしき光』(以下、『輝かしき光』と略記)には、より整理された形の伝記がある。ここでは、主としてサハーウィーの記述に拠りながら、著者の生涯について簡単に紹介する。

彼は、七七四(一三七二/七三)⁽⁷⁾年、アレッポに生まれた。母方の曾祖父は、アレッポのカーディー(裁判官)を務めたファフル・アッディーン・アブー・アムル・ウスマーン (Faḥr al-Din Abū 'Amr 'Uṣmān) である。イブン・ハティープ・アンナースィリーヤは、『コーラン』暗誦のほか、ハディースやシャーフィイー派法学など、当時のウラマーとして典型的な学問をまず故郷アレッポで修めた。その後、七八五(一三八七/八八)年に父に連れられて訪れたエルサレムで何人かの学者について学んだのを皮切りに、ダマスクスやハマーなどシリア各地やカイロで学んでいる⁽⁸⁾。

彼の師としてサハーウィーが数多く挙げている人物の中には、サハーウィーの師でもある高名な学者イブン・ハジャール・アスカラーニー⁽⁹⁾の名も見える。イブン・ハティープ・アンナースイリーヤは、八〇八（一四〇五／〇六）年にカイロで彼の著作から数多くノートを取ったようである。また彼は、『選り抜きの真珠』以外に、タフスィールやハディース関係の著作も数点著した⁽¹⁰⁾。

八一六（一四一三／一四）年、彼はアレppoのカディーに就任し、以後、没する前年に罷免されるまで、断続的にこの職を務めた。その間、スルターン・タタルに要請されて、トリポリのカディーも務めている。また、同じ頃、アレppoのウマイヤ・モスクのハティープ（説教師）やイマーム（導師）も務め、さらにアレppoやたびたび訪れたカイロで、ハディースなどを講じた。八四三（一四四〇）年にカイロから帰る途中で発病し、アレppoに帰還して間もなく、同年十一（四）月に没した。追悼礼拝がウマイヤ・モスクをはじめとするアレppo市内の複数のモスクでおこなわれたのち、市街南部のマカーム門外に故人が生前に用意していた墓に埋葬された。アレppoのナীব（総督）も葬儀の列に加わり棺を担いだという⁽¹¹⁾。

（二） 成立時期と内容

イブン・ハティープ・アンナースイリーヤは、イブン・ハジャール・アスカラーニーがアレppoを訪れた際に、自宅を宿として提供するとともに彼の授業に出席している。これは八三六（一四三三）年のことで、当時イブン・ハティープ・アンナースイリーヤは、本書の清書をおこなっている途中であった。イブン・ハジャール・アスカラーニーは、本書の草稿と清書を読んで、多くの点を補ったという⁽¹²⁾。このことより、八三六（一四三三）年から著者が没した八四三（一四四〇）年までの間に、本書が完成したことが判る。本書は、著者の最晩年に完成した作品と言えよう。

さて、本書は四巻から成り、O写本の現存部分で数えると合計七三三葉⁽¹⁴⁾で、地方史としては中規模の作品である。以下、O写本に基づいて本書の構成を見ていくことにする⁽¹⁵⁾。本書は、序文「第一巻、一・裏―二・表」⁽¹⁶⁾と、それに続く地誌の部分「第一巻、二・表―十三・表」、そして第一巻の十三・裏から第四巻の末尾に及ぶ伝記集の三部分に大きく分けられる。多くの地方史と同様、地誌に比して伝記集の分量が圧倒的に多い。

序文では、地方史の常として、神への讃辞に続いてアレツポの美点が簡潔に綴られている。ついで、カマル・アツディーン・イブン・アルアディームが、約四十巻という、それまでにない規模のアレツポ地方史である『アレツポ史の探究』⁽¹⁷⁾を編纂したものの、清書を完成することなく没してしまったことが述べられ、その簡潔な続編を著すつもりであると、本書の執筆目的が表明されている。

続いて著者は、本書の内容を説明している。まず地誌部分の章題を挙げたあと、伝記集の部分について解説している。それによると、伝記集に収録したのは、アレツポまたは周辺地域の出身かまたは他所から当地に到来した学者や敬虔な人々、詩人などと、当地を支配したスルターンやナীব、カーディー達などで、時期区分に関しては、フラグがアレツポを征服した六五八（一二六〇）年以降に没した人物を対象としたという。また、伝記項目はイスム（ファーストネーム）順に配列される。そして、序文の最後に本書の書名が提示されている。

続く地誌の部分の最初は、「第一章 アレツポとその名、建設者、美称」⁽¹⁸⁾で、アレツポのアラビア語名ハラブやギリシア語名ペロエアなどの由来や、それらに関わりのある都市建設者、支配者について述べられている。「第二章 境界と諸地区」⁽¹⁹⁾では、イスラーム勢力下に入ってからシリアの地域区分に基づいて、アレツポ地方の範囲の変遷が説明されている。章題からはアレツポ地方内部の地名についての説明も期待されるが、それについては幾つかの地名が挙げられるのみである。「第三章 美点と特徴」⁽²⁰⁾では、アレツポの美点に言及したハディースが示されたのち、市壁、内城、市門な

どが描写され、ティムールによる破壊（一四〇〇年）とその後の修復についても説明される。「第四章 征服⁽²¹⁾」には、イスラーム勢力によるアレppo征服の経緯が簡潔に記されている。最後の「第五章 河川、水路、用水、遺跡・参詣場所・廟・札拝所の扱い⁽²²⁾」では、まずアレppoの水源となっている河川や泉と、そこから市街へと引かれてくる人工水路についての説明がなされる。後半には、ムスリムが祈願や札拝のために訪れる主な墓廟やモスクなどの説明が見られる。

以上の地誌の部分は、第三章と第五章に著者の同時代に関する情報が幾つか見られる他は、主として『アレppo史の探究』の第一巻やイブン・シャッダードのアレppo地誌⁽²³⁾に収められた情報からの抜粋である。

次に、伝記集の部分について見ていこう。序文で述べられているとおり、イスム順に伝記が並んでいる。第一巻は、イブラーヒーム (Ibrahim) というイスムを持つ人物からサービト (Ṭābit) まで、四二七項目の伝記が収められている。以下、第二巻にはジャービル (Ġābir) からアブド・アルカーヒル (Abd al-Qāhir) までの三八三項目、第三巻にはアブド・アルカーフィー ('Abd al-Kāfi) からムハンマド (Muḥammad) の途中までの三八九項目、第四巻には、ムハンマドの途中からユヌス (Yūnus) までのイスムを持つ人名に、アブー・ヤズィード (Abū Yazīd)⁽²⁴⁾ の一項目を加えた四三九項目の伝記がある。四巻を合わせると一六三八項目に達する。ただし、後述するように、O写本には書写の誤りと見られる欠落が見えられ、第三巻だけをとっても、少なくとも二一項目が欠落している。そのため、本書全体に渡って調査を進めれば、あと数十項目が追加される可能性もある。

伝記集に収められた人物は、おおむね著者が序文で述べた基準に沿って選択されているようである。『アレppo史の探究』に比べると、スルターンとナーイブを筆頭に、為政者や有力行政官の伝記が目につく。各項目内の情報としては、氏名、生没情報に加え、ウラマーの場合は師弟関係を含む学歴などが、マムルーク軍人の場合には主人への言及や職歴などが見られる。本書の伝記部分は、前近代アラビア語伝記集の標準的な特徴を備えていると言える。⁽²⁵⁾

地誌とイスム順の伝記集からなる本書は、形式面においてもイブン・アルアディームの『アレツポ史の探究』に倣った著作である。また、後世の郷土史家達によって本書の続編や要約版と銘打った作品が編まれていった。このように、連綿と続くアレツポ地方史叙述の伝統の中に本書が位置づけられることは、著者本人も序文で述べていることであり、つとに指摘されていることでもある。⁽²⁶⁾しかし、同時代の歴史家との関係にも注意を向けおく必要がある。なかでも重要なのが、先に触れたイブン・ハジャール・アスカラーニーとその弟子であるサハーウィーとの関係であろう。

先に述べたように、イブン・ハティーブ・アンナースイリーヤは、イブン・ハジャール・アスカラーニーから多くを学んだだけでなく、本書の執筆に際して草稿や清書に目を通してもらっている。しかし逆に、イブン・ハジャール・アスカラーニーは、この機会にイブン・ハティーブ・アンナースイリーヤに聞くところがあつたと述べており、互いに情報を交換していたようである。事実、イブン・ハジャール・アスカラーニーの著作には、イブン・ハティーブ・アンナースイリーヤを情報源とする記述が見られる。⁽²⁸⁾このように、両者は相互に影響を与え合う関係であつたと言える。さらに、イブン・ハジャール・アスカラーニーの弟子サハーウィーも本書を精読したと述べており、本書は彼が著した『輝かしき光』の情報源の一つである。⁽²⁹⁾この二人を含め、同時代ないしはそれに近い時代の歴史家達とイブン・ハティーブ・アンナースイリーヤとの相互関係を明らかにしていくことも今後の課題であらう。

二 写 本

(一) 概要

本書の写本に関するまとまった紹介は、アレツポの歴史家タツバーフが二十世紀初頭に著した『アレツポ史における貴顕達の情報』(以下、『貴顕達の情報』と略記)の序文に見られる。⁽³⁰⁾彼はこの書を著すにあたって、当時アレツポのア

フマデイーヤ学院(al-Madrasa al-Ahmadia)の蔵書であつたダマスクス写本⁽³¹⁾に加えて、パリのフランス国立図書館蔵本(P1写本)の写真をフランスのイスラーム学者マスイニヨン(Louis Masignon)を通じて入手し利用した。さらに、直接利用したかどうかは不明であるが、ベルリン⁽³²⁾、ゴータ⁽³³⁾、ロンドン⁽³⁴⁾にある各一点と、イスタンブルにある二点の写本⁽³⁵⁾にも言及している⁽³⁶⁾。

『黄金の蔵』の校訂者による序論においても本書が紹介されており、その中で写本にも触れられている。そこには、タッバーフの書に見える七点に加えて、イラクのモースルにあるという写本一点が挙げられている⁽³⁷⁾。なお、ブロッケルマンのアラビア語書誌には、上記のベルリン、ゴータ、ロンドンの三写本の他に、コペンハーゲンにも一点存在する⁽³⁸⁾とが示されているが、写本目録に示されている各章題を見る限り、この写本は、しばしば本書と混同されるイブン・アッシフナ(Ibn al-Sina)のアレppo地誌である⁽³⁸⁾。

以上の三者が触れていないO写本について言及したのは、フランツ・ローゼンタールである。彼は、サハーウィーの『歴史家を非難する者に対する批判の表明』の英訳注の中で、O写本を紹介している⁽³⁹⁾。

さらに、パリのフランス国立図書館にもう一点、本書と思われる写本(P2写本)が蔵されている⁽⁴⁰⁾。第一葉・表に、この写本がイブン・アルアディームのアレppo史(Tarīḥ Ḥalab)であるという旨の書き込みがあるが、実際の内容は本書の第一・二巻に相当するようである。

以上の十点が、今までのところ知られている本書の写本ということになる。以下では、これらの諸写本のうち、全巻が揃っているO写本と、O写本と対校すべき写本の一つであるP1写本について、少し詳しく見ていくことにする。

(二) O写本

○写本は四巻から成り、各巻末に書寫終了日付と場所が記されている。それによると、第一巻が八七六年二月二九日（二四七一年八月十六日）、第二巻が同年五月十日（同年十月二四日）、第三巻が同年七月二二日（二四七二年一月四日）、第四巻が同年八月十二日（同年一月二三日）に、いずれもメッカで書き写されている。著者が没してから三十年余りのちに写された、比較的古い写本であると言える。書寫生の氏名は不明である。

各巻の扉や第一葉表には、歴代所有者の書き込みが見られる。読み取れる範囲で入手時期と所有者名を挙げると次のようになる。最も古い書き込みは、イブラーヒム・ブン・アフマド・ブン・ムハンマド・イブン・アルムツラー・ハラビーのもので、一〇二六年一月下旬（一六一七年一月下旬）という日付がある。この人物は、本書の要約版を著したイブン・アルムツラー父子の子孫で一〇三〇（一二二一）年以降に没したアレppoの詩人と思われる⁽⁴¹⁾。ついでこの写本は、一〇三二年四月（一二三三年二月）に、ヒジャーズイー・ブン・ウマル・ブン・ムハンマドなる人物のものとなった⁽⁴²⁾。そしてその三十年後の一〇六二年九月（一二五二年八／九月）には、アブー・アルワファー・ブン・ウマル・アルデイー・シャーファイイーが手に入れている。この人物は、おそらくアレppoのシャーファイイー派のムフティーとウマイヤ・モスクのワーズ（訓戒師）を務めた人物である⁽⁴³⁾。さらに二十年後の一〇八二（一二七一／七二）年には、シャイフ・ムハンマドなる人物の手に渡った⁽⁴⁴⁾。以上が、アラビア文字で書かれた書き込みのうち判読し得たものであるが、これらの他に、端が欠けていたり塗りつぶされていたりして判読しがたい書き込みが幾つかある。

各巻の扉には、オクスフォード大学マートン・カレッジの蔵書である旨がラテン語で記されている。それによると、この写本は一六七三年四月三十日⁽⁴⁵⁾にロベルトウス・ハンティントンなる人物が寄贈したものである⁽⁴⁶⁾。以上の書き込みから、この四冊の写本が、十七世紀の間にアレppo人の間を転々としたあと、世紀後半にはイギリスに渡っていったことが判る。

表 O写本第三巻の伝記項目欠落状況

No.	O写本	欠落状況	P1写本
1	7 b	項目 'Abd al-Laṭīf b. Muḥammad... の2行目までと、項目 'Abd al-Laṭīf b. Naṣr... の後半が接合。	7 b-8 a
2	46 a	項目 'Alī b. Sulaymān b. 'Alī b. Muḥammad b. Ḥasan... が欠落。	34 b
3	59 b	項目 'Alī b. Muḥammad b. Aḥmad b. 'Alī al-Ḥasanī... の末尾から2行目までと、項目 'Alī b. Muḥammad b. Sulaymān... の末尾が接合。	48 b-49 b
4	59 b	項目 'Alī b. Muḥammad b. Aḥmad b. Muḥammad... が欠落。	48 b-49 a
5	59 b	項目 'Alī b. Muḥammad b. Aḥmad b. Munawwar... が欠落。	49 a
6	59 b	項目 'Alī b. Muḥammad b. Abī Bakr b. Murīr... が欠落。	49 a
7	64 a	項目 'Alī b. Mamdūd b. Ġāmi' al-Zāhid... が欠落。	54 a
8	64 a	項目 'Alī b. Muḥammad b. Naṣr Allāh... の末尾から3行目までと、項目 'Alī b. Muḥammad al-Ḥalabī 'Alā' al-Dīn... の末尾が接合。	54 b
9	66 a	項目 'Alī b. Maḥmūd b. 'Alī b. Maḥmūd Abū al-Ḥasan 'Alā' al-Dīn... が欠落。	56 b
10	71 a-b	項目 'Umar b. Ibrāhīm b. Sālīm... が欠落。	62 a
11	99 b	項目 'Umaršāh al-Ruknī... が欠落。	90 b
12	102 a	項目 'Īsā al-Mu'azzam が欠落。	93 a
13	103 b	項目 Ġāzī b. Qara Arslān b. Artuq... が欠落。	94 b-95 a
14	109 b	項目 al-Qāsim b. Abī Bakr Qāsim... が欠落。	101 a
15	122 b	項目 Kay Qubād Sulṭān al-Rūm... が欠落。	113 b
16	122 b	項目 Kay Kāwūs b. Kay Ḥusraw... が欠落。	113 b
17	136 a	項目 Muḥammad b. Aḥmad b. 'Abbās... が欠落。	127 b
18	159 b	項目 Muḥammad b. Baktūn al-Zāhirī... が欠落。	141 b-142 a
19	160 a	項目 Muḥammad b. Baylik al-Sarawī... が欠落。	142 b
20	163 b	項目 Muḥammad b. Abī Bakr 'Alī b. Ḥudayṭa(?)... が欠落。	146 a-b
21	163 b	項目 Muḥammad b. Abī Bakr Muḥammad b. Aḥmad b. Muḥammad... が欠落。	146 b

※写本葉数表示のaとbは、それぞれ表と裏を示す。

本写本は、第一巻が二一葉、第二巻が一七九葉、第三巻が一六六葉、第四巻が一七七葉ある。写真で見ると限り保存状態は総じて悪くはないが、汚れや染み、欠損などが部分的に見られる。特に第四巻は状態があまり良くなく、末尾付近に若干の欠落があり、また汚れや葉の欠損によって判読し難い部分が一割程度ある。⁽⁴⁷⁾全巻を通して同一の筆跡で、独特の書体で書かれている。敢えて分類するならばナスフ書体となるであろうが、いずれにせよかなり読みづらい筆跡である。一葉の行数は、二五行である。

各巻の構成については、本書の内容紹介として既に述べたので繰り返さない。管見の限り、本書の全四巻が揃っているのは、このO写本だけである。この点で、現存する中では非常に重要な写本であると言えるが、上記のような物理的損傷だけでなく、書写時の遺漏もかなり見られる。第三巻だけが残っているP1写本とO写本第三巻の伝記項目を比較すると、表にまとめたように後者には二一項目の欠落が見つかった。他の巻についても同様の欠落が予想されるため、O写本の価値を定めるためにも、他の写本との校合調査をさらに進める必要がある。

(三) P1写本

P1写本は、本書第三巻に相当する一冊のみで、一五〇葉から成る。流麗ではないが読みやすいナスフ書体で記されている。一葉の行数は二六行前後。現存部分には汚れや染みは少ないが、違う筆跡で写された葉に差し替えられている箇所がある。⁽⁴⁹⁾

書写に関する情報は写本自体には記されていないが、タツバーフは著者の自筆本であろうと推定している。しかしその根拠は示されていない。この写本には、項目と項目の間に大きな空白が取られている箇所が数多くある。これらの空白は、後に項目を追加するか修正点を記入するために設けられたように見える。タツバーフがP1写本を著者自筆本と推

定した理由は、このような特徴にあるのかもしれない。しかしもう少し詳しく検討してみる必要がある。ここでは、O写本との比較からこの問題を考えてみる。

先に述べたとおり、P1写本には存在するがO写本の第三巻では欠落している伝記は二一項目に及ぶが、逆にO写本に存在する伝記項目でP1写本において欠落しているものは、後に差し替えられた第十一葉・裏に入るべき項目を除けば、一項目のみである。⁽⁵¹⁾ 前者の欠落は、差し替え時に既にこの部分が失われていたか、差し替えた書写生が書き落としたものと思われる。

以上の箇所以外に見られるP1写本の欠落は、細かいものばかりである。たとえばO写本ではウスマーン・ブン・アビ・アルワファー… (‘Uman b. Abī al-Wafā’…) の項目末尾にある没年などを記した部分が、P1写本では欠けている。⁽⁵²⁾ また、ウマル・ブン・ハーッジー… (‘Umar b. Haggī’…) の生年が書かれるべき箇所が、P1写本では数文字分空白になっているが、O写本では補われている。⁽⁵³⁾

さらに、P1写本には項目の順序の乱れが少なくとも二箇所見られ、いずれもO写本では修正されている。すなわち、P1写本ではウマル・ブン・マスウード… (‘Umar b. Masūd’…) の項目がウマル・ブン・マフムード… (‘Umar b. Maḥmūd’…) の前にあって、名前のアルファベットで考えると順序が逆になってしまっているが、O写本では両者が入れ替えられアルファベット順に並べられている。⁽⁵⁴⁾ もう一箇所の例は、アブド・アルカーフィー・ブン・ムハンマド… (‘Abd al-Kaḥfī b. Muḥammad’…) の項目とアブド・アルカリーム・ブン・アフマド… (‘Abd al-Karīm b. Aḥmad’…) の項目で、P1写本ではこの二項目が逆順に配列されている。ただし、これは後に差し替えられた部分なので、差し替え時に生じた誤りという可能性もある。⁽⁵⁵⁾

以上の検討より、後に差し替えられた部分を除けば、O写本と比較してP1写本には項目の欠落がほとんど認められな

い一方で、項目の誤配列や生没情報の記入漏れの存在が確認された。これらの特徴と、項目間に取られた空白の存在は、このP1写本が、著者による下書きと関係の深い写本であることを示していると思われる。つまり、空白部分の配置を含めて下書きから作られた写しか、タツバーフが言うように、著者自身の手による下書きのどちらかであると考えられる。いずれにせよ、P1写本は、O写本第三巻を利用する際に対校すべき重要な写本であると言える。

おわりに

校訂本が出版されていない現時点で『選り抜きの真珠』を利用するためには、写本を用いなくてはならない。その際、どの写本を底本にすればよいのだろうか。残念ながら、今のところこの問いに対する答えは保留せざるを得ない。本稿での検討から、O写本は全四巻が揃っているものの欠落・欠損のかなりある写本であることが判明した。O写本を底本とすべきかどうかを判断するためには、さらなる調査が必要であろう。その結果によっては、巻毎に異なる写本を底本にすることが必要になるかもしれない。また、管見の限りでは第四巻はO写本にのみ現存する。したがって、保存状態の良い第四巻の欠落部を復元するためには、他の史料を博搜して、本書から引用された部分を抽出する作業も必要になろう。このように困難な作業が予想されるが、現在シリアで進められているという校訂作業が実を結ぶことを期待したい。

(付記) 本稿は、平成十五年度稲盛財団研究助成金による研究成果の一部である。

註

- (1) 'Alī b. Muḥammad Ibn Ḥaṭīb al-Nāṣirīya, *al-Durr al-muntahab fī tarīḥ Ḥalab*.
- (2) Ahmad b. Ibrāhīm Sībī Ibn al-'Aḡamī, *Kunūz al-dhahab fī tarīḥ Ḥalab*. Ed. by Sawqī Sa'ī and Faḥī al-Bakkūr, 2vols, Ḥalab, 1996. 著者は、八八四（一四七九）年没。
- (3) 『黄金の蔵』の校訂者は、『選り抜きの真珠』の校訂作業がアレppoとホムスで進められていると述べるが、それ以上具体的な情報は記していない。『黄金の蔵』第一巻、十四頁。
- (4) Library of Merton College, Ms. Codd. Or. XI. XV.
- (5) Bibliothèque Nationale, Ms. Arabe 2139.
- (6) Muḥammad 'Abd al-Raḥmān al-Saḥāwī, *al-Daw' al-tāmi' li-aḥl al-qarn al-tāsī'*, 12vols, Bayrūt, n. d. 著者は、九〇二（一四九七）年没。
- (7) ヒジュラ暦で示される年月日は、そのあとの（ ）内に西暦を添える。相当する西暦が二ヶ月や二年にまたがる場合などは、／で区切って双方の月や年を示す。また、ヒジュラ暦の月名もムハッラム月を一月として数字で表記する。
- (8) 『輝かしき光』第五巻、三〇三—三〇五頁。
- (9) Ahmad b. 'Alī Ibn Ḥaḡar al-'Asqalānī, 七七三—八五二（一二三二—一四四九）年。
- (10) 『輝かしき光』五巻、三〇六—三〇七頁。『黄金の蔵』第二巻、一五四頁。
- (11) al-Malk al-Zāhir 'Īṣar. 在位八二四（一四一一）年。
- (12) 『輝かしき光』第五巻、三〇六—三〇七頁。『黄金の蔵』第二巻、一四七—一四八頁。
- (13) Ahmad b. 'Alī Ibn Ḥaḡar al-'Asqalānī, *Imbū' al-ḡunnr bi-andā' al-'unnr*, vol. 1, ed. by Muḥammad Ahmad Dahmān, Dimāṣq, 1979 (AH 1399) : p. 4.
- (14) 第一巻が二一一葉、第二巻が一七九葉、第三巻が一六六葉、第四巻が一七七葉。
- (15) O 写本の調査に際しては、伊藤隆郎氏の助力を得た。記して謝意を表す。

- (16) 写本の該当箇所を示す場合、たとえば第一葉の表は、「一・表」という具合に表記する。
- (17) Kamāl al-Dīn 'Umar Ibn al-'Adīm, *Buḡyat al-talab fī tarīḡ Ḥalab*. 著者は六六〇(一二六二)年没。
- (18) al-faṣl al-awwal fī Ḥalab wa asmā'ihā wa man banā'ihā wa alqāb-hā [第一卷'二・表—三・表]。
- (19) al-faṣl al-tānī fī ḡīkr ḥudūd-hā wa a'māl-hā [第一卷'三・表—四・表]。
- (20) al-faṣl al-tāliṡ fī ḡīkr faḍl-hā wa ḡasā'is-hā [第一卷'四・表—七・表]。
- (21) al-faṣl al-rābi' fī faṭḥ-hā [第一卷'七・表]。
- (22) al-faṣl al-ḡānis fī nahr-hā wa qunīy-hā wa mā'ihā wa mu'āmalat-hā min al-āṡar wa al-ma'ābid wa al-maṣāhid wa al-masāḡid [第一卷'七・表—十三・表]。
- (23) 'Izz al-Dīn Ibn Ṣaddād, *al-Mīqāt al-ḡāṡir fī ḡīkr umarā' al-Ṣām wa al-ḡazīra*, vol. 1, part 1. Ed. by Dominique Sourdel, Damas, 1953.
- (24) この人名のみイスマではなくクンヤ(アブー・ハリーフの父)の形をとっている。伝記の主はオスマン朝君主バヤズィト一世であり、アブー・ヤズィードとはバヤズィトのアラビア語での表記である。例外的にクンヤで提示される人名なので、末尾に配列されたのであろう。
- (25) 前近代におけるアラビア語伝記集の特徴については、谷口淳一「人物を伝える—アラビア語伝記文学」(林佳世子・舩屋友子編『記録と表象—史料が語るイスラーム世界』[イスラーム地域研究叢書八]東京大学出版会、二〇〇五年)を参照せよ。
- (26) 太田敬子「Ibn ash-Shihnaのアレップ史についての研究」(『オリエント』三三卷、二号、一九九〇年)九十頁には、本書を含むアレップ地方史叙述の伝統について簡潔なまとめがある。
- (27) Ibn Ḥaḡar al-'Asqalānī, *op. cit.*, vol. 1, p. 4.
- (28) たとえば' *idem*, vol. 1, pp. 209, 293, 388.
- (29) 『輝かき光』五卷'三〇六頁。Muḥammad b. 'Abd al-Rahmān al-Saḡāwī, *al-I'tān bi-t-tawḡḡ li-man ḡamna [ahl]*

- al-tarīḥ*, Dimaṣq, AH 1349 (1930/31) : p. 115 (『歴史(家)を非難する者に対する批判の表明』)。Muḥammad Rāḡib al-Ṭabbāḥ, *Ṭīām al-nubalā' bi-tarīḥ Ḥalab al-Ṣaḥā'*, 4 vols. + index, 2nd ed., 1988 : vol. 1, p. 41 (『ハレップ史における貴顕達の情報』。以下『貴顕達の情報』を略記)。
- (30) 『貴顕達の情報』第一巻、四十一—四一頁。
- (31) Maktabat al-Asad al-Waṭaniya, Ms. 14501-14502.
- (32) Deutsche Staatsbibliothek, Ms. 9791 (Mf. 154).
- (33) Forschungsbibliothek Gotha, Ms. orient. A 1772.
- (34) British Museum, Ms. orient. 436 (Arund. Or. 25).
- (35) 一点は、ラーベリ・モスタの旧蔵本で、現在はスレイマン・パシ図書館にあると思われる(Süleymaniye Kütüphanesi, Ms. Laleli, 2036-2037)。もう一点は、ハーリス・バク(Halis Bak)というタシバーフと同時代の人物の個人蔵であったようだが、現状については確認できなかった。
- (36) 以上の他に、エルサレムのハーリディーヤ図書館(al-Maktaba al-Ḥalidiya)には、イブン・ハティーブ・アンナーシリヤーによる集成本があつて、そこには一五〇名分の伝記が含まれているという。『貴顕達の情報』第一巻、四一頁。
- (37) ただし所蔵場所は明記されていない。この写本は六三葉しかなく、断片的なもののようである。『黄金の蔵』第一巻、十四頁。
- (38) Carl Brockelmann, *Geschichte der arabischen Literatur*, 5 vols., Leiden, 1937-1949 : vol. 2, p. 43, supplement vol. 2, p. 30. コペンハーゲンの写本について、[A. F. Mehren,] *Codices Orientales Bibliothecae Regiae Hafniensis, pars II, Hafniae* (Copenhagen), 1851 : pp. 93-94 (no. CXLII)を参照。イブン・アミンフナのアレップ地誌が『選り抜きの真珠』と混同される点については、太田前掲論文、九五—九九頁を参照。
- (39) Franz Rosenthal, *A History of Muslim Historiography*, Leiden, 1968 : p. 445, n. 1.

- (40) Bibliothèque Nationale, Ms. Arabe 5853. Cf. Georges Vajda, *Index général des manuscrits arabes musulmans de la Bibliothèque Nationale de Paris*, Paris, 1953: p. 312.
- (41) Ibrāhīm b. Ahmad b. Muḥammad Ibn al-Mullā al-Halabī. この人物については, Brockelmann, *op. cit.*, vol. 2, pp. 352-353 および『貴顕達の情報』第六卷「二〇〇—二〇三頁を参照せよ。『選り抜きの真珠』の要約版 *al-Muntahab min al-Durr al-muntahab* を著したの *ibn* Muḥammad Ibn al-Mullā とその息子 Ahmad とある『貴顕達の情報』第一卷「四一—四二頁」。この人物は, Ahmad の息子であろう。なお、この人物の書き込みは、第一巻を除く各巻の第一葉・表に見える。
- (42) al-Ḥigāzī b. 'Umar b. Muḥammad. この人物については特定できなかった。書き込みは、第一巻を除く各巻の第一葉・表に見える。
- (43) Abū al-Wafā' b. 'Umar al-Ardī al-Safīr. この人物の兄弟と思われる Muḥammad b. 'Umar の伝記の中に言及がある『貴顕達の情報』第六卷「一九九頁」。この人物の書き込みは、第二巻の第一葉・表のみに見られる。
- (44) al-ṣayy Muḥammad al-sahr bi-Manda (?). この人物については、特定できなかった。書き込みは、第一巻と第二巻の扉の裏、第四巻の第一葉・表にある。
- (45) グレゴリオ暦では四月二十日。
- (46) ex dono Mri Roberti Huntington Socii. Apr: 30, 1673 とある。この人物についても、特定できなかった。この書き込みは、第一巻から第三巻までは扉の表に、第四巻は扉の裏にある。なお、書き込みの読解に際しては、新田一郎教授の教示を得た。記して謝意を表す。
- (47) O 写本第四巻の一七六・裏は、伝記項目の途中で終わっているが、一七七・表は白紙である。
- (48) O 写本第四巻「一一一葉および一七三—一七七葉」。
- (49) P1 写本「一葉および十一—十二葉」。
- (50) 'Abd al-Malik b. 'Alī... の項目冒頭から 'Uṣman b. Qutlubak... の項目末尾まで。O 写本第三巻「十一・表—二五・裏

に相当する。

(51) 項目 Muhammad b. Ibrāhīm b. Muhammad... が欠落し、該当部分が空白となっている [P1 写本、一一九・裏]。この項目は、O 写本では第三卷、一二八・裏に存在する。

(52) O 写本第三卷、二七・裏。P1 写本、十五・表。

(53) O 写本第三卷、七九・表。P1 写本、七一・表。

(54) O 写本第三卷、九六・表。P1 写本、八七・裏—八八・表。

(55) O 写本第三卷、一・裏。P1 写本、一・裏。